

二〇一五年 七月十八日（土曜日）～八月十六日（日曜日）

第七回 夏休み！毎朝お坊さん修行

歎異抄 第七條

(真宗聖典六二九頁)

たんにしよう だいしちじよう

(語注は、真宗大谷派

宗務所出版部による)

無碍の一道

なにもものにもさまたげら

れないひとすじ道。

天神地祇

天の神・地の神。

魔界外道

魔の世界に住んで仏教の

さまたげをなす悪魔と仏

教以外の教えを信じて真

実の道をさまたげる人々。

罪悪も・・・

いかなる罪悪も、そのむ

くいをもたらすことができ

きない。

諸善

もろもろの善根・善行。

ひとつ ねんぶつしゃ むげ いちどう

一 念仏者は、無碍の一道なり。そ

のいわれいかんとならば、信心の行

者には、天神地祇も敬伏し、魔界外

道も障碍することなし。罪悪も業報

を感じることあたわず、諸善もおよ

ぶことなきゆえに、無碍の一道なり

と云々 うんぬん

と云々

と云々

と云々

と云々

と云々

【現代語訳】

ねんぶつしゃ い みち さわ ぶつ ほう おこな もの
念仏者の行く道には碍りがない。仏になる法を行う者に
かみがみ きようぶく あくま しょうがい
は神々も敬伏したまい、悪魔も障害することができぬ。
しんじん ざいあく かいしよう ぎょうほう なや
また、信心は罪悪を解消して、その業報に悩むことなから
ねんぶつ たい とく なら ぜん
しめ、念仏に対しては、その徳に並ぶような善はないからで
ある。

かふく ちようえつ ぜんあく わずら なや
禍福を超越して、善悪に煩い悩まされることのない、
ねんぶつ むげ いちどう
そこに念仏による無碍の一道があるのである。

金子大栄校注『歎異抄』五十二頁（岩波文庫）

十七条憲法

第十条

聖徳太子

とおに曰わく、忿を絶ち、瞋を棄てて、人の違ふことを

怒らざれ。人皆心有り。心おのおの執れること有り。彼は

すれば我は非ず。我是すれば彼は非ず。我必ず聖に非ず。

彼必ず愚かに非ず。共に是れ凡夫ならくのみ。是く非しき

理、詎か能く定むべけん。相共に賢く愚かなること、鑲の

端無きが如し。是をもつて、彼人瞋ると雖も、還りて我が

失ちを恐れよ。我独り得たりと雖も、衆に従いて同じく拳

え。

【現代語訳】

十じゅうにいう。心こころの中の憤いきどおりをなくし、憤いきどおりを表情ひょうじょうに出ださないようにし、他ほかの人ひとが自分じぶんと違ちがうことをしても怒おこつてはならない。人ひとそれぞれに考かんがえがあり、それぞれに自分じぶんがこれだと思おもうことがある。相手あいてがこれこそといつても自分じぶんは良よくないと思おもうし、自分じぶんがこれこそと思おもつても相手あいては良よくないとする。自分じぶんは必かならず聖人せいじんで、相手あいてが必かならず愚おろかだというわけではない。皆みんなともに凡夫ほんぶなのだ。そもそもこれよが良よいとか良よくないとか、誰だれが決きめるのだらう。お互たがい誰だれも賢かしこくもあり愚おろかでもある。それは耳輪みみわには端はしがないようなものだ。こあいてういいきどおうわけおもで、相手あいてが憤いきどおっていたら、むいけんしろ自分じぶんに間違まちがいがあるのではないかとおそれなさい。自分じぶんではこれだと思おもつても、みんなの意見いけんに従したがつて行動こうどうしなさい。

「不東」 (一部抜粋)

『大慈恩寺三藏法師伝』
だいじおんじさんぞうほうしでん

【白文】
はくぶん

自念我先發願。若不至天竺。終不東歸一步。
じねんがせんほつがんにやくふしてんじくじゆふとうきいっぽ

今何故來。寧可就西而死。豈歸東而生。
こんがこらいにようかじゆさいにしききとうにしよう

【書き下し文】
かくだぶん

自ら念ず。我れ先に發願す。若し天竺に至らずば
みずかねんわれ先にほつがんもてんじくいた

終に東歸一步せずと。今、何故ぞ來たる。
ついとうきいっぽいまなにゆえき

寧ろ西に就いて死すべし。豈に東に歸して生ずべけんや。
むしにしつしあとうきしよ

【現代語訳】

自分じぶんは先さきに願がん（誓ちかい）をたてて、若もし天竺てんじく（インド）に

到着とうちやくしなければ一歩いっぽも東ひがし（唐、今の中国）に帰かえらないとした。

今いまなぜ引ひき返かえしているのか。

むしろ西にし（天竺てんじく）に向むかって死しぬべきだ。どうして東ひがしに

帰かえって生いきる事ができるのだろうか。

れんごうかんたいかいさん
連合艦隊解散の辞（一部抜粋）

とうごうへいはちろう
東郷平八郎

【原文】

しんみょうはただへいその たんれんにつとめ たたかわずしてすでにかてるもの
神明ハ唯平素ノ鍛錬ニカメ、 戦ハズシテ既ニ勝テル者

にしょうりのえいかんをさずくるとどうじに、いつしようにまんぞくしてじへい
ニ勝利ノ栄冠ヲ授クルト同時ニ、 一勝ニ満足シテ治平

にやすんずるものよりただちにこれをうばう こじんいわくかちてかぶとのお
ニ安ズル者ヨリ直チニ之ヲ褫フ、 古人曰ク勝テ兜ノ緒

をしめよと

ヲ締メヨト。

【現代語訳】

神は平素ひたすら鍛錬に努め、戦う前に既に戦勝を約束された者に勝利の栄冠を授けると同時に、一勝に満足し太平に安閑としている者からは、ただちにその栄冠をとりあげてしまうであろう。昔のことわざにも教えている「勝つてかぶとの緒を締めよ」と。

お寺てらでのお約束やくそく

- 一、山門さんもんをくぐる時ときにおじぎをします。
- 二、お寺てらの階段かいだんを上がったところあで合掌がっしょうします。
- 三、本堂ほんどうに入る時はいと出る時とでは、おじぎをします。
- 四、大きい声おおこえであいさつします。
- 五、お坊さんぼうさんの言うこといをよく聞ききます。
- 六、教本きょうほんを大切たいせつにあつかいます。
- 七、頑張がんばって正座せいざします。
- 八、靴くつは下駄箱げたばこに入れいます。
- 九、トイレのスリッパは、
きちんとそろえます。
- 十、お友達ともだちと仲良なかよくします。

ぼくたち、わたしたちは、お約束やくそくを守まもって修行しゆぎようをやりとげます！

名前

真宗大谷派

法輪山

證大寺

☎

〇三(三六五三) 四四九九